



TITLE:

戦争の地理學的考察(一一)

AUTHOR(S):

小川, [琢]治

---

CITATION:

小川, [琢]治. 戦争の地理學的考察(一一). 地球 1930, 14(5): 321-329

ISSUE DATE:

1930-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183836>

RIGHT:

# 地球 第十四卷第五號

昭和五年十一月

## 戰爭の地理學的考察（二）

小川 琢治

### 三三

武田信玄の一生奮闘の歴史は數節を重ねて述べたので略ぼ知れると信ずる。その成績を奥羽の伊達政宗、北越の上杉謙信、關東の北條早雲氏康、中國の毛利元就、四國の長曾我部元親、九州の島津義久の六雄に比して之を觀るに、箇々の戰闘に發揮した伎倆は遙かに優り、謙信を除いてはその矢面に立ち得る敵手を見なんだのに、三十八年の努力により攻略した範圍は伊達毛利島津長曾我部の諸氏よりも狭く、晩年に至り漸く三萬八千人の兵員を提げて織徳兩氏の聯合軍に向ひ得たに止つた。故に餘命尙ほ兩三年あつて參遠濃尾の野に兵を進めたとしても、背面に勁敵上杉氏を控へて果して何程の活動を爲し得たかは疑問であつて、容易迅速に織田氏の手から天下號令の權力を奪ふまでに成功することは恐らくは不可能であつたと推測される。

此の如く成功の案外に寡少にして進行の緩慢であつたのには一面には地理的位置が出兵に不便な

ること、一面には周邊の群雄が何れも手剛くて容易に屈服せぬこととて大に掣肘を被つて、十分に活動が出来なんだといふ事情があつた譯である。然れども更に内面に立ち入つて觀察すれば、信玄の長處は戰場に於ける闘將たる資質に十分であるが、將に將たる大度を持たぬといふ缺點が累を成したのである。信玄は孫子の兵法を體得したといはれてゐるが、北條早雲の如く黃石公の三略開卷第一の主將の法は務めて英雄の心を攪るに在ることは理會せなんだ。その性格を觀るに思慮の緻密は猜疑に陥り易く、決斷の果敢が常に殘酷に失し易く、有能の人物を招致するとか降將を優遇するとかいふ様な雅量がなく、徒らに力攻して城を屠り將を殺して、氣潰しに天下を征服せんとしたのである。信玄の征服戰の手始めに降服した諏訪頼茂を殺したのを甲陽軍鑑及び略譜小解の著者すらも失措と明言してゐるが、村上小笠原等の諸家が頑強の抵抗を續け、延いて上杉謙信と連年兵を構へねばならぬ羽目に陥つたのは第一歩を誤つた成行である。上毛の出兵に當つて箕輪城を屠り長野氏一家を滅し、その妻子を虐殺したるに至つて言語同斷の暴虐にして、人怨を買ひ天罰を受けるのは當然であると極言し得る。

獨逸の大戰爭を開始した當初に白佛兩國民に對して取つた恐怖主義テロリズムは我々日本人には解する能はなんだが、後に柏林大學の歴史家デルブリュック氏が獨逸參謀本部編纂のフリードリヒ大王の戰史に對して、その戰爭の真相を曲解して殲滅戰 *Vernichtungskrieg* としたのを駁撃した一篇の論文を讀んで、漸く獨逸皇帝周邊の武官等が征服は殲滅に在るとは違へてゐたことが知れた。狂暴なる項羽すらも十三歳の小兒の言を容れて外黃の降兵を阮にするのを見合せ、十數城が先を爭ふて降つ

たといふ様な東洋史乘に周知の説話は西洋に全く知れてゐず、また心會しないのも是非もないとして、信玄に遠謀深慮を吹き込むに足る文事ある謀士がなかつたのは遺憾である。己れの父を逐ひ國を纂つた二の舞を懼れて誤つて長子義信を殺し、猪武者の勝頼に信頼した如きも、自業自得といへ滅亡を早めた一因を成した。

之を要するに信玄の性格の缺陷は戰略戰術に於ける擅長の天才を滅却したもので、徒らに勞多くして功寡き結果に了つたのは怪むに足らぬ。

### 三四

信玄の短處は此の如しと雖も、その一步一步地盤を固めて四方を侵略した手續きを追跡すれば、豫定の作戰案を遂行する用意の周到にして、山谷により限定された交通線を利用する進退の巧妙であつたことには感歎せざるを得ぬものがある。今我々の使用した資料は信玄を崇拜する甲州流兵法家の手に成つたもので、考證批判の餘地はあるが、中央日本山嶽地方を戰場とした作戰に關しては他の何れの地方にも見出し難い教訓が含まれてゐる。此の點は恐らくは世界の戰史上に最高の地位を占むるに足るであらうと想はれる。故に日本を戰域として戰略地理學上から考究するに當つては信玄の用兵を唯一最良の典型として擧げるのが當然である。左に十數年に亘つて述べた信玄の軍事行動を概括して見る。

信玄の使用した戰闘員數を觀るに、初期に信虎の後を襲いで甲州一國を領した時には約八千人で

あつたのが、先づ信州の中佐久諏訪二郡を攻略し、續いて村上氏を克服して千曲川流域の大部分を收めて一萬五千人に増加し、松本伊那木曾等の西信全部を切り従へた後には三萬五千人に達し、上州西部と駿河とを加へて最大の領土を有する晩年には三萬八千人を算した。是は人烟稠密なる關東を占有する北條氏の動員し得る五萬餘人に比して二對三の割合であり、織徳兩氏の遠參以西の兵數に比すれば半數にも達し得ない。然れど百戰を経た精兵と之を指揮する選拔された將士との優越なる素質を考慮に加ふれば、上洛の大望を實現せんとしたのは必しも無謀ではなかつた。

當時使用された兵器を觀るに密集隊形を成した卒伍に必要なは刀槍にして、飛道具の弓矢は甲冑の製作の進歩に伴ひ衰へ銃器が之に代り始めてゐたが、未だ主要武器となつてゐなんだ。故に刀槍の製造は軍備上缺く可らざるもので、武田氏も大に保護獎勵した筈と想はれるが、今日之を窺ふ資料としては僅かに刀鍛冶系圖にその一端を捕捉し得るのみである。それとても系圖なるものは名工の系統を擧げて鑑定の手引とする目的で編纂され、住地名と紀年銘とがあるものが残つてゐない場合には甚だ頼りない。甲信兩國は特に少くて名工らしいものが出てゐない様である。甲州鍛冶で我々の臚上の隱銘に發見し得たのは安業なるもの唯一人で、新羅三郎義光の後裔たる小笠原家に抱へられたものらしいが、年代も作品も分らぬ。之に反して室町時代の鍛刀業は遠州島田が東海道の大名今川氏の領分内であつたから盛んで、就中義助一門は大に榮えて、その一人義綱は武田北條兩家には往來したことが系圖に見えてゐる。この一派は備前大一文字助宗の後裔であるといふ説もあるが、作風は相州系に屬するものであつた。此の他には美濃關の一派の兼舍は信州飯田及び甲府に

來て打つたといひ、身延山で打つたといふ廣舎も多分其門弟らしく、遠州高天神及び駿州島田にゐた兼明などと同じく、濃州鍛冶が東方の大小名に招致されて、武器を供給した狀況が察せられる。

戰國時代の刀工は需要過多の爲めに所謂數打といふ粗製濫造に傾き易く、關鍛冶に名器は少く、優秀なる作者として著れたものは寥々として聞えず、僅かに孫六兼元や和泉守兼定が備前長船祐定と東西に並んで名を著した位であつたが、實戰に適する武器はその手に成つたのが多かつた。

當時傳來し始めた銃器は戰場に於いて既に効果を顯はしたが、表面だけでも佛道に歸依して頭を圓めた信玄には、伴天連を歡待した信長の如き進歩的氣宇なく、又た地理の關係からも信長の如く自由に堺港から新銳の利器を輸入する便宜もなかつたらうから、従つて甲州流の戰術はその長處を十分に考慮するまでに進んでゐなかつた。信玄の歿後長篠の柵前に驍將勇士の枕を並べて仆れた事實はこの器械力無視の缺陷暴露である。

軍馬は如何といふに、此の頃五十騎を一組とした小部隊は編成されてゐたが、偵察即ち物見などに使用されるも一般の戰鬪には多數騎馬武者の出動はなかつたから、従つて多數軍馬の必要はなかつたらしい。甲斐は聖德太子の黑驪くろこまの傳説や萬葉時代の和歌に名高い如く、良馬の産地で牧場は古く處々に置かれてゐた位であるから、之を供給するには十分であつたと想はれる。

最後に戰爭の費用に充てる費用は如何といふに、信玄は之に對する準備に頗る苦心を費したらしく、甲州國內に於いて開發し得る金山の經營を試み、又多分郡内に産する絹布の販賣によつて獲た所も吸收されたと推測され、當時造つた金貨幣は甲州金として今も古錢の間に燦然と輝いてゐる。

此の方面に於ける用意の周到なりしことも、戦鬪に現はれた堅實なる行動に劣らぬ。されば甲信兩國の地方經濟の發達を圖つた功績が今尙ほ住民に記憶されるのは當然である。

### 三五

信玄の甲信兩國に於いて着々地歩を占めた軍事上の行動は父信虎の計畫の續行に始まり、恰かも雪達磨の進轉する如く次第に大を成したのである。信虎の間に武田家祖先の領土の如く考へた甲斐一國を統一し、その勢に乗じて若神子わかつくこから念場原を越えて一直北に向ひ千曲川上の南北に走る佐久郡に進出した。是が村上氏との衝突の起りで、信玄の初陣の功名は海ノ口城攻めであつたことは二四に述べた。

この谿谷は中山道の幹線たる碓氷峠（軍鑑の笛吹峠）から上田に通ずる東西に走る街道と小諸、岩村田の附近で合し、尙ほその南にも内山峠餘地峠十石峠等があるから、關東平野の西北隅の上野地方に出るには佐久地方が作戦上に重大な意義を有し、郡内の相武兩國に對すると同じく、後に小田原攻めに大手が此の方面から進出したらしいのである。

然るに此の幹線の西には村上氏が割據し、又た之に通ずる側面には諏訪氏が割據してゐた。此等の勢力の脅威を除くことが、第一の作戦の目的となつたのは極めて自然で、天文十一年の諏訪郡攻略はその第一歩で、續いて念場原よりも更に諏訪に近い大門峠を利用して村上氏の領分たる長窪に攻め入り、歸途を追躡した村上小笠原兩旗の聯合軍と大門峠の南で戦ひ、十四年に至つて諏訪郡初

めて全く治定して武田氏を歸した。

是から兩家との取り合が始つて、同年五月その聯合軍を鹽尻峠で逆撃して之を破り、翌十五年この勢に乗じて村上氏の居城葛尾城かつらぎ（坂城町の北山手）に近い今の上田の東北上野に當る戸石城を攻めた。（故吉田博士は妙法寺記に據り十九年とせられたが、晩きに失する様である）此の戦は辛うじて村上勢の後詰を撃退したとはいへ、甘利横田兩部將を失ひ、四千餘人の小勢で根據地に近い敵城を攻めんとした計畫の失敗は掩ふことが出来なかつた。

此の年續いて上州勢の攻勢に出て碓氷峠を越えて襲來したのを撃破し、翌十六年八月上田原の決戦で村上義清を破つて諏訪佐久小縣三郡を完全に占有して信濃の中心河川中島に進出することゝなつた。以上村上氏を逐ふて信濃東半國を占有するまで十年間の戦争は信玄の行動の第一期に屬する。

次に第二期に入つてから、西に小笠原本曾保科の三家から信濃西半國を奪はんとする計畫の外に東に向つて上野西部に進出して關東平野に覇を唱へんとする野心があり、北には村上氏の舊領恢復を標榜する強敵上杉謙信の侵入を喰ひ止めるといふ防禦の必要があつた。

此の間の交戦は甲府の北及び諏訪から三方面に向ふ放射狀の溪谷を利用して行はれ、二十二年松本城を陥れて小笠原長時を逐ひ、弘治元年本曾氏を降し、二年伊那郡を平げ、九年の間に信濃一國を収めたのが第二期前半の收穫であつた。

信玄はまた弘治三年から北條氏康と聯合して上州方面に進出し、此處でも亦た上杉謙信に對抗しつゝ、永祿六年箕輪城を陥れて上野西半國を占有し、七年には飛驒に進出し、八年越中までも出兵し



謙信の不俱戴の仇に報復せんとす運動に多少の掣肘を加へた。永祿十年織田氏と婚姻を結び十一年今川北條兩家と斷交するに至る十二年間は第二期の後半にして、常に上杉氏との競争を續け、その間に領土を擴大せんとする努力は尋常一樣でなかつた。

永祿十一年以後は信玄の第三期の活動で、富士川に沿ひ下山街道を経て駿河に出て、一舉に今川氏眞を駿府から逐ひ、翌十二年正月北條氏四萬五千の大軍と三ヶ月に餘る對陣の後、疾風の如く兵を收めて駿河を引き上げ、續いて沼津附近に出動して北條氏の根據地たる韮山方面を威嚇せんと試み、八月に至り大舉して小田原攻めを試み、三増峠で北條氏の追撃軍を撃破してその膽を寒からしめた。此等の運動は餘命の永からざるを覺悟したとはいへ、眞に脱兎の如き敏活振りを示したもので用兵術の奥の手が遺憾なく發揮された觀がある。

元龜二年氏康死して北條氏への後顧の患が除かれ、駿河一圓が信玄の手に收められたのはその前半期の大なる收穫にして、永祿三年彌々三萬八千人の大軍を引率して上洛の最後の活動に入つた。

第三期後半の參遠兩國への出兵には、平坦なる東海道筋と天龍川、木曾川兩谿谷に沿ふた山間の交通線を利用することが出来たとはいへ、地勢の利便を缺いた地方から進出した行動は實に目醒ましく、元龜三年十二月三方ヶ原で織德聯合軍を一蹴して、參河まで進んだ掉尾の活躍は名刀の土壇拂いの切れ味に比すべき痛快を感じしめてゐる。

このカタストロフは恰かも敵手に二三目置かせた高段棋客の打掛けに了つた碁の如く、再び起ればこれから如何なる好著を以つて守勢の敵手を壓迫したか無限の興味ある疑問として永遠に残され

てゐる。犬豚兒勝頼は之を打ち續いた形で、無謀の作戰により二年後に忽ち敗局となつたが、信玄自身ならば新銳の武器に頼つて銳鋒を摧かんとする信長の一流の巧妙なる戰術の係歸には陥らなかつたらうから、満局に至るまでに參尾濃の間で花々しい決戦を見たことゝ想はれる。然れども信玄の北條氏康に對する戰績を見るに、是も置棋の形であつて局部的に大石を屠つても、終局の勝利を獲る決戦には至らなかつたことから察すれば、東海道を西上してヒタ押に上洛の途を進め得たとしても、信長が根據を離れた客兵に對して堅城に據つて固守する方策を執つたならば、謙信信玄兩雄の小田原城攻め位の結果しか獲なかつたのでないかといふ想像は必しも見當違ひでなからう。

之を要するに信玄の努力は地理の關係から觀て最善最良の手段を盡したものであるが、何代も割據した地方豪族を本領安堵のまゝ麾下に招致するといふ方針に出なんだ爲めに、死を以つて守る堅城を攻め、屢窮鼠の如き敵軍の鋒鏑に驍將を失ひ、四五ヶ國の土地を攻略するに生涯の大部分を費すに至つたのは好男子惜むらくは兵法に通じながら、兵略を曉らなんだと評する外ない。